

---

# チョコレートと子ネコと憂鬱

夜影

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

チョコレートと子ネコと憂鬱

### 【著者名】

Z8812E

夜影

### 【あらすじ】

捨てネコと出会った少年の、日常的な切なさとぐだらなさに溢れた、心に温もりを与える物語。ひとつつの「喪失」を乗り越える短編小説。記念すべき夜影のデビュー作です。

放課後、おれが学校からバスじゃなく徒歩で帰ったのには特別な理由などなかった。つまりはただの気まぐれだつたわけで、まさかその道の途中でこんなものに出会うだなんて予想もしていなかつた。

捨てネコを見つけてしまつたのだ。

学校から駅へ向かうには、公園のそばを通りの必要がある。おれは駅を目指して歩いていたのだから、当然その道を通りて行った。二月だというのに春のようなあたたかい空気がおれを包んでくれていたので、ひとりで歩いていてもさびしくはなかつた。散歩しているような気分でたのしかつた。そう、たのしかつたのだ。だが、南風が吹いて葉のない桜の枝を揺らしたとき、おれはいやな予感がした。ただしきいうなら、予感ではなくて予想なのだが。

汚れた子ネコが、道路を横切ろうとして身がまえていた。向こうには車が見える。その車は子ネコに気づいていないようで、子ネコをよけるようすも減速するようすもなかつた。どう考へてもデンジヤーだ。このままでは子ネコは車にひかれてメンチカツの材料になつてしまつ。

メンチカツは食べたいが、子ネコが死んでしまう姿は見たくはない。だから助けようと思つ。

いきなり走りだして子ネコをつかむことをまつさきに考えたが、

子ネコが逃げだしてしまえば子ネコはそのまま車にひかれてしまうだろう。だから歩いてそろりそろりと子ネコに近づいていった。

子ネコがすこしでも動いたら、たとえコケででも捕まえなければならぬ。緊張して、鼓動が高まる。見開いた瞳は乾き、呼吸は乱れ、あつくもないのに汗が湧く。足元に桶でも置けば流れる滝のごとき汗であたたかい風呂ができたかも知れない。それだけの量の汗だった。

そして、あと三歩で手が届く範囲まで近づいたときだつた。子ネコの足が動くのを、かすかだがたしかに感じた。まさに歩き出やうとしている。

そう思つたあと、おれは気づけば両足でしつかりと踏み切つていた。両手はすこしでもとおくまで届くよしにピンと伸ばして、ついでに足もつよく踏み切つた余韻でピンと伸びて、地面と平行な直線になつたおれは、けつしてウーラマン♪♪♪をしていたわけではない。

そんな苦労のかいあつてか、子ネコは無事におれの両手の平に包まれてくれた。これでもう車にひかれることはない。そのかわり、「イテエツー！」

おれは着地までは考へていなかつた。おれは人間には不需要なテクニック、胴体着陸を余儀なくされ、どぞのつまりは腹をおもいつきり打つてしまつたというわけだ。当然、いたみを感じないわけがない。その場でしばらく悶絶する。

そして、おれの手からスルリと抜けた子ネコはとつと、キヨトンとした顔でおれを見つめてきた。何が起きたのか、おそれくは理解できていないのでひづ。

「にやあ

子ネコは寝転がつてゐるおれに、体を擦り寄らせた。普通ネコは足に擦り寄るものだが、今回おれが寝転がつてゐるため顔に、だ。顔が汚れる。

「なんだ、人なつっこいな。……飼いネコか？」

立ち上がりながら子ネコの首を見てみたが、首輪がついてなかつた。となると、エサをもらつている野良か、捨てネコのどちらかだろ？ できれば前者であつてほしいものだが、どうなのかはわからぬ。ネコのみぞ知るところだ。

「またあぶない渡り方しないよ？ おれが向こうまで運んでやるよ」

子ネコの両脇腹をつかんで、左右を見て道路を渡る。公園に近づくかたちだ。

歩道に乗つて子ネコを放してやると、子ネコは一歩散に公園の中に入つていつた。そのあとを追つと、子ネコは公園の中央に置かれてあつたダンボールの中に駆け込んだ。子ネコの家なのかも知れない。すると、この子ネコは捨てネコであるということになる。

「やうかおまえ、捨てられたのか。弁当の残りでもやりたいところだけど、あいにくと今日は全部食つちまつたんだ。わるいな

子ネコ相手に本氣で謝つていると、

「にゃあ

と、ひとことだけ鳴いたのだった。『氣にしてないよ』とでも言われた気分になつて、おれは子ネコに別れを告げて公園をあとにした。太陽はまだしばらく沈みそうになかつた。

「そうだ、名前でもつけてやらないとな

しばらく歩いてからひとりごちたのだが、すれ違つた女子高生に変な顔をされてしまった。子ネコに擦り寄られた顔が汚れているのかと思ったのだが、わざわざ自分を写メつてみても汚れていなかつた。どうやら独り言が聞こえてしまつたらしい。そしてあの子ネコは汚れていたのではなく、白毛が焦げ茶色なのだと気づいた。

あまいものはきらいだ。だから、チョコレートはあまり好きじゃない。

だが、栄養失調で死んでしまうかと思うほど腹が減っているのなら話は別だ。

目の前の地面に、ポツンと板チョコレートが一枚置かれていた。この際、誰のものかとかその辺は考えないことにした。栄養がほしい。その欲望を抑え切れない。

ウルトラマのような跳躍で板チョコレートに突っ込んだ。着地のことは考えなかつた。この腹が膨れるなら、なんでもよかつた。きらいなあまいものでも、誰のものでも、うまく着地できなくて、どうでもいい。

しかし、曲の中はそんなにやわしくはないようで、なんと板チミコレートはコ ゲラーも裸足で逃げ出すような空中浮遊を始めておれから遠ざかっていったのだ。

おのれ、お三へのくせに注意な！」

おれはおれのもとを離れていた板チリムーティーで、全速力で駆け出した。ちなみに今のおれの座右の銘は『来るもの拒まず、去るもの追おづ』だつたりする。

ପରିବାରରେ କିମ୍ବା ପରିବାରରେ କିମ୍ବା ପରିବାରରେ କିମ୍ବା ପରିବାରରେ କିମ୍ବା

いつだつたが、人間は叫ぶと全力を發揮できると聞いたことがあ  
る。そのことを意識して叫んだわけではないのだが、事実おれはか

つてないくらいの速さで走れたような気がする。しかしそれでもチヨコレートには追いつけない。チヨコレートは曲がり角の向こうに消えてしまった。見失うわけにはいかない。

「負けるものかああああーー！」

「一ナードでもスピードを落とさずに走ったおれは、いつのまにか板チョコレートが昨日の子ネコに変わっていたことに気がついた。」  
「なるほど、確かに色は一緒だ」

「いやあ、おれはおまえの心を読むのが上手だ。おまえはおれを愛する。」

どれだけ走ったのかはわからないが、その瞬間は突如訪れた。

おれは足元の注意を怠っていたようだ。おれの足は地面を捕えられず、道のわきにある崖に向かって落下運動を始めていた。間一髪でふちに捕まるが、ながくは持たないだろう。気づけば下にはマグマが煮えたぎっている。子ネコの姿は見えない。

走馬灯が見えた。おれがチョコレートと子ネコを追いかける姿しか再生されない走馬灯だった。それはないだろう、と憂鬱になる。そして走馬灯が終了を告げると同時に、おれの手は崖のふちから滑つておれの命も終了を告げようとしていた。

「イテヒつーー！」

体の節々が痛むとおれは自分が夢の中にいたことに気がついた。おれは床に寝転んでいる。状況を理解しようと周りを見回すと、すこしづつ記憶がよみがえってきた。今は授業中だ。

授業中にうたた寝して、寝相がわるくて席から落ちたのだと推測できた。ちなみにちょうどプリントの問題を解いていたクラスの面々は沈黙していた。おれの叫び声はよく響いたことだろう。そう思うと自然と顔が朱く染まつていつてしまう。そして、

「…………」

プリントを解くクラスの面々を監視していた『先生』という役職に属している中年の男があれを睨んでいた。ちなみにこの教師の名前をおれは覚えていない。

「ハ木橋…………」

そうだ、あいつは数学担当の、前橋？　いや、前池？　前島？　どれも違う気がしてきた。とにかく『前なんとか』だ。なぜ、人の名前というものは覚えていくのだろうか。重要性がすくないからかも知れない。人間は意味のあることのほうが覚えやすいからだ。おれはその考えを

「ハ木橋、健郎！　すぐに返事をしなさいーー！」

「はい、すみませんでした！」

ありがたい特別課題を前なんとかからいただいたおれは昼休み、  
一貞に愚痴つていた。

「つまんない授業をするからねむくなるんだ。もつとおもしろおか  
しい授業してくれりやねむくならぬのにな」

実にくだらない内容の会話だが、一貞はさすがおれの親友たる人  
物。頷きながらまじめに聞いてくれる。

「僕もそう思うな。……だけどさすがに授業中に寝言はないんじゃ  
ない?」

「なつ……言つてたのか!…」

「うん。なんかごによごによ言つてた」

できれば信じたくないで「」ことだ。せつとチョコがビリビリうとか  
言つていたにちがいない。恥ずかしさのあまり、この学校の屋上か  
ら落ちてしまいたくなつた。とりあえず逝けるぐらこの高さはある  
はずだ。まあ、本当に逝くつもりはないが。

そんなことよりも、おれは一貞に言つておかなければならぬこと  
とがあつた。あの夢を見て、おれは決心したのだ。

「一貞」

「何?」

おおきく息を吸い込んで、言つ。

「子ネコを飼えないか?」

そう、おれはあの子ネコをもらつてくれる人を探してやることに  
したのだ。おれはマンションに住んでいるから動物を飼えないのでは  
ほかに探すしかないし。

「「めん、僕、ネコアレルギーだから。本当は飼いたいんだけどね  
ネコ」

ガックリと肩を落としていると、一貞が口を開いた。

「とりあえず僕の周りの人にも聞いてみるよ。どんなネコ? 名前

は？」

一貞はおれの力になつてくれるといつわけだ。

やつぱり親友というものはすばらしい。こいつにならおれの『健郎コレクション』の一部を譲り渡してもいい。ちなみに『健郎コレクション』とは、男のロマンがつまつた夢の宝石箱であり、具体的にいつとイヌやネコやネズミなどのファンシーなぬいぐるみのコレクションだ。つい最近、かわいいフクロウのぬいぐるみがおさめられた。

「ありがとう、一貞。お礼は何がいい？ イヌか？ ネコか？ 力エルは勘弁してくれ。あれはお気に入りなんだ」

「なんの話？ その前に質問に答えてよ」

「質問？」

「子ネコの名前は？ どんなネコ？」

名前か。そういえば決めていなかつた。

どんな名前がいいかと迷つていると、さつきの夢のこと思い出した。あの子ネコの色からひとつの単語が浮かぶ。

「チョコ。茶色い体をしてるから、チョコだ」

2

チョコを見つけてから、はやくも四日が過ぎていた。

おれと一貞で毎日知り合いを当たつてみたが、結局チョコをもらつてくれる人は見つからなかつた。現在はとりあえずおれが公園でエサを与えている。それでわかつたのだが、チョコはかなりのグルメだ。人の食べ残しはもちろん、生の魚すら食わない。ネコ缶を買ってやらなければ食べてくれないので。遊び半分でチョコレートも試してみたが、ダメだった。

「にやあ」

チヨコがダンボールハウスから飛び出ておれに擦り寄った。

顔を覚えてくれたらしい。かわいいやつだ。

「まつたく……。チヨコはこんなにかわいいのに、誰が捨てたんだ？」

独り言をブチブチとつぶやいているど、チヨコがおれの横を通り抜けて、公園のベンチに飛び乗つてひなたぼっこを始めた。おれはダンボールハウスの中にネコ缶を置いておくと、チヨコの方へと歩み始めた。太陽は世界をたそがれの色に染めていた。西田で前が見えない。

「おれも隣に座つていいか？」

子ネコ相手に本気で問い合わせながら、おれはチヨコの隣に腰かけた。すぐにチヨコが膝の上に乗つてくる。そこで眠つてもらつちゃあ困るんだが。

「参つたな。動けやしねえ」

しかしチヨコをどかすとか不粋なマネはしない。ひとまず、ヒマなので辺りを見渡してみることにする。

緑色の大地、金色の太陽、そして、赤い空。世界は今日もうつくしい。

明日もこんな景色が見れますように。

真上を見上げて、今はまだ見えないあの月に、願いをかけてみた。太陽じゃなくて月なのは、月にはかわいいウサギがいるからだつたりする。太陽にはかわいい生物がない。

そして、空に向けていた目線をチヨコに戻そつとすると、

「…………」

なんと、おれの通つている高校の制服を着た女子が目の前でおれを見つめていた。しかも、見覚えがある。クラスメイトだったはずだ。

「ハ木橋くん、だよね？ なにしてんの？」

学校帰りにわざわざ歩いているやつはめずらしげいが、びつやら彼女もそうだったらしい。公園におれの姿を見つけて近づいてきたのだろう。

「ひなたぼつ！」

「ジジくさつ」

「なんとでも言つがいい。それよりも氣になるのは、名前、なんだつけ。……確か、矢倉、だつたか？」

「ハズレ。矢口でした！」

「そう言われば、そうだ。取つかかりをえあれば思い出せる。下の名前は加奈香、だつたよな」

「すこし特殊な名前だつたから、よく覚えてい

「正解。……で、そのネコ、ハ木橋くんの？」

矢口がチョコを指をして問うた。

「ベリモー」

「ベリモーってなんだよ」

とつあえず話すくらになら書はないと思つたので、チョコのことを話すこととした。

「こいつ、チョコつていうんだけど、捨てネコなんだ。飼い主を探してんだけど、見つかるまではおれが世話をすることにした。だから、おれのかと言わるとベリモー」

「おじしそうな名前……」

矢口はなんだかボーッとチョコを見つめていやがつた。放つておいたらチョコを食つてしまいそうなほどの危険な目だ。おれの座右の銘を『食われる前にやれ』に変更した。

「おい、聞いてたか？」

「あ、うんうん。聞いてた聞いてた」

本当かどうかはつたがわしいところだが、話を進めることにした。

「それで、矢口はチョコを飼えないか？」

「あー……『メン。すでにイヌが一匹いるからこじめられちゃうか

も

「そうか。残念だ」

「はじめられるよつなどこのこチヨコを渡すわけにはいかない。当たり前だ。」

「でも、一緒にチヨコの世話をするべらこならできるかも」

「……いつしょに?」

英語で言えば、トウギャザー?

あれから、すこしややこしくことになつた。

おれと違つて、矢口には料理部（人数がすくないので正式には同好会なのだが）があるので、一応チヨコの世話は交代制にすることになった。それでもおれは毎日チヨコに会いに行つたのだが。

しかも、公園までの帰り道を矢口と歩くようになり、その姿をほのかのクラスメイトに見られて妙な勘ぐりを受けることになつた。とくに、一貞から。

チヨコを見つけてから一週間が過ぎたある日であり、矢口と一緒に帰ろうと言っていた日であり、同時に、本当ならおれの当番ではない日のことだ。

「健郎。ゲームセンターにライオンのかわいいぬいぐるみがあったんだけど、帰りに一緒に行かない?」

一貞から、とてもなく魅力的な単語が発せられたので、思わず脊髄反射で頷きそうになつた。だが、次に頭をよぎつたのは、茶色い子ネコ。さらに次は、その子ネコと遊んでいる女子高生。いくら今日は参加自由とはいえ、勝手に帰るわけにはいかない。せめて何か断つておくべきだ。

「わるい、一貞。すこし待つてくれ」

おれは一貞から一旦離れて、教室のだいぶとおくの方にいた矢口に話しかけた。

「矢口。わるいけど、今日はチヨコを任せていいか？ ちょっと寄りたい場所が……」

「うん、わかった。まあ、たまには休暇もとりたまえ」

そういうながら、矢口はおれの肩にポンと手を置いた。おどけているのがわかる。『気にするな』と、暗に伝えているのだろう。それなら矢口に任せていいいだろう。そもそも、ほかにチヨコを任せられるやつがないし。

「それじゃあ、頼んだ。……チヨコにもおれが謝つてたと伝えてくれ」

「イエス、サー」

矢口に別れを告げて一貞のもとへ戻ると、一貞はなにやらニヤニヤしていた。

「何、笑つてんだ？」

「いや、仲がいいなと思つてさ」

『誰と』なのかはあえて聞かないことにした。まあ、予想はつくが。

「それより、さつせとゲーセン行かないか？ どんなライオンだ？ UFOキャッチャーか？」

UFOキャッチャーだった。

ライオンの両脇腹をひつかいただけで帰つてきたりFOに「おまえには宇宙人を名乗る資格などねえ！」と叫んでから、なくなつた百円玉を補充するために千円札を両替機に突つ込もうとしたときだつた。

「あ、そうだ」

一貞が急に口を開いた。千円札が機械に吸い込まれていくを見つめながら耳をかたむける。

「子ネコをもらつてくれる人が見つかつたよ」  
千円札はうまく機械に読み取られなかつたらしく、ジーッという人工音とともに帰つてきた。もう一度、千円札を差し込む。

「誰だ？」

おれの口が勝手に動いた。千円札はまた帰ってくる。おかえり。  
「隣に住んでる高郷さんって人。大学生。ひとり暮らしでさみしい  
んだって。子ネコの話をしたら、うれしそうにしてたよ」

千円札のシワをのばして、また機械に入れる。こいついらしゃい。  
「どうする？ 一度、会ってみる？」

やつと千円札が機械に認知された。百円玉に両替されて出てくる。  
「ああ。今度、案内してくれ」

百円玉をサイフに入れた。一気に重くなつたが、ライオンのぬい  
ぐるみなんかもうほしくなかつた。両替などしなければよかつた。  
「今日、このまま寄つていく？ ネコに愛着がわいたら、つらくな  
るだらう」

とりあえず頷いて一貞のつしろを歩き始める。その家に着くまで  
のあいだ、おれは一言も話をなかつた。  
もうおそい、などとは言えなかつた。

高郷さんとやらに会つて、てきとうな会話をした次の日、高郷さ  
んと何を話して、何をしたのかも記憶になかつた。覚えているのは、  
大学生のくせに一軒家に住んでいるというワッヂチなどになると、何か  
まづいあまいものを食つたことだけだ。何故か食わずにほいられな  
かつた。

そして今はまた、ダンボールを抱えて矢口と一緒に高郷さんの家  
に向かつて歩いている。一貞はネコアレルギーなので欠員。

「もう、お別れなんだな」

ダンボールに向かつて本気で話しかける。

「にゃあ」

ダンボールからの返事は、『また会える？』と尋ねてきているよ  
うに聞こえた。

「たまには遊びに行こう?」

横を歩く矢口が慰めてくれた。多分チラリとしたおれの姿を知つてゐるので、一貞よりはおれの心が読めたのだろう。

「そうだな」

ダンボールの中には、ちいさな手製のぬいぐるみを回収させておいた。茶色い生地でつくれた、子ネコのぬいぐるみだ。今さらは遊びの対象にされて、さうそくキズができるかも知れない。そんなことを考えていると、あつという間に高郷さんの家までたどり着いた。隣には『坂井』の表札。一貞の家だ。

ピンポーン。

高郷さんの家のチャイムを鳴らすと、ダンボールもまた鳴いた。

「にゃあ」

ダンホールは『なんの音?』と言いたかったのだと思った。

高郷さんの家の玄関が開き、男が出てきた。何か挨拶をされる。何か挨拶を返す。何かお礼を言われる。そして、

「それじゃあ、チヨウをお願いします」

何かを言つて、ダンボールを男に手わたした。何回もお礼を言われる。うれしいたい。

「にゃあ」

『さよなら』

「ああ、ここでお別れだ」

あたらしく親友ができたようだのしかつた。

「にゃあ」

『今まで、ありがと』

「おまえがいてくれて、よかつたよ」

そう、たのしかつたのだ。

「にゃあ」

『それなら、なんで?』

「なんでだろうな

そう、それはもう、過去のことなのだ。

「にゃあ

『なんで泣いてるの？』

3

チョコがいなくなつた次の日の放課後、自分の部屋で窓の外をボンヤリと眺めていた。辺りはすっかり暗くなっている。太陽が沈んだのだ。

暗闇に沈んだ大地、黒い空、そして太陽も月も見えない。世界は色をなくしてしまつた。

「会えないわけじゃない。なのに……」

何故今日は高郷さんの家に行かなかつたのか。行けばチョコにも会えただろうに。

「…………」

気がつくと六時を回つていた。いつもの日課をする時間だ。

手袋をはめて、部屋のクローゼットを開けて中に入る。普通なら衣類がしまつてあるはずのそこには、ひとつの中箱が保管されている。できるだけきれいなタオルを右手に、左手で箱のふたを開けた。出てくるのは、多数のぬいぐるみたち。これぞ『健郎コレクション』だ。いつもなら脳みその血管が切れるのではないかと心配するほど興奮する瞬間である。

しかし、今日はそんな気分ではなかつた。これは大問題だ。

いつもの通りにぬいぐるみたちをタオルで拭いていく。至福の快楽感は、やつてこない。

イヌも、ネズミも、フクロウもカエルもライオンもゾウも、おれ

の心を癒してはくれない。

そして、

「ネコ……」

白ネコのぬごぐるみを手袋越しにつかんだ。強い風が、窓をガタガタと揺らしているのに怒りを覚えた。

『健郎コレクション』の中から、ネコだけをすべて抜き出した。全部で四つのネコを窓から放り投げた。ネコたちに泥がついて茶色に染まる。洗つても落ちそうにない。こんなものはあるべきじやない。

テツテケテケテケテツテ

そのとき、ケータイが軽快なメロディーを鳴らし始めた。その音楽はアニメ『カメとサボテン』のメインテーマ曲だ。『カメとサボテン』はかわいいカメと言葉を話すサボテンの友情物語なのだが、今はどうでもいい。

力任せにケータイを開いて、電話がかかってきたことを確認する。一貞からだ。

「もしもし」

『ああ、健郎。大変なんだ!』

誰が聞いてもわかるほど、一貞は慌てていた。理由を尋ねてみると、「何が大変なんだ?」

『チョコガ……』

『……チョコガ?』

胸騒ぎとは、このことかも知れない。しかもそれは的中してしまつたのだ。

『チョコガ、いなくなつた!』

その言葉を聞くや否や、おれは雨の降りだした空の下へと駆け出していくつた。

走りながら一貞に聞いたところ、チヨ「は高郷さんの家でずっとかなしげに鳴きながら誰かを探すかのように歩き回っていたらしい。おれにとつてあいつがおおきな存在であつたと同時に、あいつにとつてのおれもまた必要不可欠だったのだ。そして今日の曇すぎ、高郷さんの家から姿を消したのだという。ダンボールに入れて連れていったのだ。道などわからないに違いない。

「矢口にも連絡しておいてくれ！」

走りながら電話の向こうに叫ぶ。

『電話番号、わかんない！』

電話の向こうのやつは、おれがあまり音を聞き取れる状況でないのを知つていて、叫び返してくれる。

「おれも知らねえよ！」

『連絡網で調べてみ……』

そのさきは聞こえなかつた。落ちていたバナナの皮を踏んできれいなズツコケを披露してしまつたからだ。今どきこれはないだろ。誰だよ、捨てたの。

『……もし、もしもし！？』

「わるい、ケータイを落とした！」

「コケたことは伏せておく。

『とりあえずウチに来て！ そこですこし落ち着け！』

「わかつた！ 矢口への連絡はよろしくな！」

雨はつよくなるばかりだ。急がないと。

一貞の家に着くと、タオルと着替えとあたたかいコーヒーを出してもらつた。コーヒーはブラックで、飲むと頭が冴えてきた。いさかあつくなりすぎていたようだ。

高郷さんは今もチヨコを探しているらしい。矢口は一貞の家で待つているとすぐにやつて來た。

「チヨコがどこにいるか、見当はつく？」

「一貞の問いに、

「あの公園……」「

矢口とハモリつつも答える。

「どの公園？」

この際、これ以上の問いは無視することにする。それよりも重要なのは、

「矢口、おれはあの公園に行つてみる」

「わたしも行く」

矢口と頷き合つて、一貞の家の玄関を開けようとしたとき、

「待つて、健郎。力サは……」

「おれはいらない。矢口は？」

「わたしは持つてる」

それなら大丈夫だと、扉を破り飛ばすかのような勢いでさうにつよさを増した雨の中に出た。すると、うしろから服をつかまれた。

「風邪、引くから」

矢口が力サを差し出していた。一貞からもうつてきたのか、一本持つている。

「……わかった」

矢口から力サを受け取つて差す。

「ハ木橋くん、なんでそこまでチヨコのために必死なの？」

「……」

チヨコは、かわいいから。

それだけじゃなかつた。

「……昔、この辺に引っ越してくる前、ネコを飼つてたんだ。おれが小学四年生になったころだつたから、もう六年前か。そのネコ、白いネコだつたからミルクつて名前だつたんだけど、よくおれに懐いてたんだ。おれもミルクのことが大好きだつた。……だけある日突然、いなくなつたんだ」

「いなくなつた？」

「ああ。……だいぶ年寄りだつたから、おれに死ぬといふを見せたくなかったのかも知れない。おれはすぐ悲しんださ」

「…………」

「……それで、ミルクを探して一ヶ月。小学生にとつちや長い時間だ。一ヶ月探しても見つからなくて、それで諦めたんだ。……あとすぐに、今のマンションへの引っ越しが決まつたんだ。もうミルクとは会えなくなるんだつて、引っ越しの日もまた泣いたものだミルクとチヨコ。同じ日に遭わせてたまるか。

「今度は、諦めない」

話を終えると、ちょうど川のとなりの道に来ていた。コンクリートの崖の下に汚れた川がある。公園に行くには橋を渡る必要がある。橋の上にはチヨコレーと同じ色の動くものがあつた。よく見ると風にはためくただの布きれだつた。子ネコに見えたのは、そうであつてほしいという気持ちゆえか。

その布きれを横目に橋を渡ろうつとすると、

「ハ木橋くん、アレつてもしかして……」

矢口が驚いた声を出した。振り返つて見ると、矢口は布きれを指さしている。

「ただの布じやないか」

強い風が吹いて、布きれは川へと飛ばされていく。それでも矢口の指はあるものを指さしたまま固定されているかのように動かない。布きれを指さしていたわけではなかつたのだ。

「…………」

矢口は何かを指さしたその姿勢で言葉をなくしたかのように口を閉ざして固まつていった。顔は青ざめていく。

視線を矢口から矢口が指さした方向へと移す。流れる川の中にチヨコレーと同じ色の、動かないものが見えた。子ネコに見えなかつたのは、そうであつてほしくないという気持ちゆえか。しかしよく見れば見るほど、おれが愛したあの子ネコだつた。

チヨコがこの世からいなくなつた。公園へと向かう途中で崖から落ちて、川に飲まれた。

チヨコが追いかけていたのは、誰だったのか。

チヨコが死んだのは、誰のせいだったのか。

そう、おれのせいだ。

学校など行く気はなかつたが、習慣とこつのはおやひしこもので、いつもと回じ朝五時半に起きてしまつた。しかたなくやる氣の起きないまま『健郎コレクション』を磨いてから学校へ来てしまつた。

「おはよひ、健郎」

一貞が話しかけてきた。昨日のことは忘れておいたはずなのだが、それにしてはやけにあかるい口調だ。まさか、チヨコが死んでよかつたなどと思つていいのか？

「おはよ、ハ木橋くん」

矢口が立て続けに話しかけてきた。一貞と回じく、あかるい口調だ。チヨコが死んでつらこのはおれだけじやないと思つたのだが、どうやら違つようだ。

ひとり、席に座つて前なんとかが来るのを待つていて。これほど前なんとかが待ちどおしい日はかつてない。喜べ、前なんとか。だが、待ちどおしいものがあるときほど時間はゆっくりと流れるもので、そのあいだに一貞にまた話しかけられてしまつた。できればひとりでいたいのに。

「健郎、昨日ゲームセンターで白いネコのぬいぐるみを見つけたんだけど……」

「ネコ？」

一貞の考えがまったくわからなかつた。今、このおれにネコの話ををするほどにぶいやつだとは思わなかつた。

気づいたら、一貞を睨んでいた。基本的に平和主義である一貞は、

」の手の感情は苦手なはずだ。いらだちや、憎しみとかいった、負の感情のことだ。

一眞は閉口して、おれに謝りながら去つていった。  
やつと、前なんとかが教室にやつて來た。

昼休み。弁当を食つて、食後の運動をするための時間。母親が作った弁当は泥が材料なのかと疑つほどまずかつた。とくに、玉子焼き。ありますぞ。

弁当を半分も食わずにカバンにしまつと、矢口が近づいて來た。

「ハ木橋くん」

「なんだ?」

返事をするのもわざらわしい。

「今日、バレンタインでしょ? だから、これあげる」

矢口がおれの手に無理やり何かの包みを握らせた。

周りを見るにもなかつたので氣づかなかつたが、なるほど、女子同士で友チョクを渡しているのが見える。それに、今日は一月十四日だ。

だが、だからなんだというのか。

「あまいものはきらいだ」

だから、チョクはあまり好きじゃない。

「ハ木橋くん?」

席を立つと、渡された包みを持って教室を出て行つた。おれがいないといつものサッカーのメンバーが足りなくなるのだが、そんなことはもう、どうでもいい。

太陽は雲に隠れていた。

おもい鉄の扉を、全身を使って開けた。

本来なら立ち入り禁止のはずの屋上へと、出る。

「……さむいな

つめたい風がおれに襲いかかってくるのだが、今のおれの座右の銘は『健郎は風の子』だ。風に負けてなどいられない。おれは進む。昼休みはあと十分ほど残っている。実に長い。

グラウンドから見つからないようにそつそつとは逆の方向に進む。下の遠方に高速道路が走っている方向だ。いまかく言つと、北々西。柵にしがみついて、遠くを走る高速道路を見下す。

「お、あの車、チョコレー<sup>ト</sup>の色みてえ」

ふいに、チョコの姿が浮かんできた。あいつのために買ってやつたネコ缶。まだ残ってるんだ。もつたいいながら、誰か食つてくれよ。

「あの車は、牛乳みたいだ」

ミルクは七年間、おれと一緒にたらしい。まだおれが立つてもいいところから、あいつはいたんだ。

チョコはたつたの、八日間。

「昼休みもあと五分か」

おれがあいつを拾わなければ、あいつは高郷さんの家を飛び出して川に落ちることもなかつた。おれが全ての元凶だ。高郷さんも、一貞も、そして矢口も巻き込んで、その結果がこれだ。

「償つてわけじゃない」

柵に片足をかけた。

「ただ、あいつに会いに行くんだ」

柵を乗り越えて、その向こうにあつたちいさな足場に両足を乗せる。

そのとき、いまだに手に握っていた包みに気がついた。ずっと握っていたことは知っていたが、初めて『認識』した。

「昼休みはあと三分。……食つてからでもおそくない

包みを開いて、中のものをつまむ。チョコレートのクッキーだ。まよいのはわかつていても、食べてみたかった。一口食べたら終わりにしそう。

「……あまい。まよい」

いまさらになつて思つたのだが、なぜ矢口はこのクッキーを渡したのか。本人に聞いてもいいが、昼休みはもう残りみじかい。聞く必要もないだろう。

ネコのぬいぐるみ。なぜ一貞がそんなことを言つたのか。本人に聞いてもいいが、昼休みはもう残りみじかい。聞く必要もないだろう。

なぜなら、おれはもう、死ぬからだ。

「もう、昼休みが終わる……」

学校の下を走る車に向けて飛ぼうと足に力を込めた、そのとき、

「ハ木橋くん！」

チャイムと同時に鉄の扉が開いた。

「矢口！？ なんでここに？」

そこにいたのは、見間違えるはずもない、子ネコと一緒に育ててくれた、矢口加奈香だった。

「探したんだから……」

見れば、矢口の肩は息切れのために上下している。

「矢口……」

矢口が一步一歩、おれに近づいてくる。

「クッキー、食べた？」

逆光なので、矢口の表情は見えない。

「あまいものはきらいだ。……だけど、食べた」

「どうだつた？ 結構自信はあるんだけど」

ウソをつくかどうするか、迷つた。なんとなく正直に答えておきたかった。

「言つただろ？ あまいものはきらいだつて」

「……そつか」

おれは、矢口に顔を見られないよう振り返った。せつと変な顔をしている。

「もう一口食つてみたら、うまいかもな」

「そうかもね。やつてみてよ」

クッキーの包みを開けて、その中のひとつを口に運ぶ。

「……やっぱり、あまいな」

矢口の顔は見えないのだが、矢口がかなしそうな顔をしてるのは予想がついた。

「……でも、うまい」

もちろん、ウソだ。『ウソも方便』ってやつだ。

「……無理しないで」

「ああ、わかった」

なぜだか、下の車の流れが急に遠のいた気がした。多分、つまらない授業を受けてうたた寝する気持ちになつたからだと思つ。矢口のおかげだ。

「矢口が来てくれてよかつた」

「うん」

たかが一匹の子ネコのために、命を懸けたことを後悔した。

「思いとどまれてよかつた」

「うん」

そりやまあ、チョコのことを忘れるわけじゃないござ。せつはミル

クと同じ。

「ふつ切れでよかつた」

「うん」

空を見上げると、雲の切れ間から太陽がここにちは。おれたちは

あのスポットライトの下で生きてきた。そして、生きていくのだ。

「授業、行こう?」

「このままサボりでえ」

「ほりほり、そんなこと言つてないで。そこ、あぶないし」

「そうだな。……ちょっと待つてくれ

足を柵にかけよつとしたとき、

「あつ」

クッキーの包みが手から滑り落ちた。まずいが大切なクッキーだ。つい、手を伸ばしてそれを取ろうとする。

「ハ木橋くん！！」

自分がバランスを崩しているのに気がついたのは、矢口の叫びを聞いてからだ。

「気がついたら、おれは闇の中にいた。地獄なのか？ それとも別のでこか？」

地獄ならば、おれは死んだことになる。

「にやあ」

チヨコの声が聞こえた気がした。これはびつ聞いてもチヨコの声だ。

「にやあ」

「ひさしひりだな」

闇の中でもはつきりと浮かぶ焦げ茶色。

「にやあ」

チヨコがおれの足元にまとわりついてくる。くすぐったい。

「ずっと、おまえに会いたかったんだ。おまえがおれの全てだったんだ」

「にやあ」

「だけど、いつまでも頼つてなんていられないんだ」

「にやあ」

チヨコの鳴き声が何を訴えているのかわからない。当たり前だ。

ネコの言葉をニンゲンの言葉に置き換えるはずもない。わかつていたんだ。

全部、おれの、甘えた空想だ。

「一番あまくてまずかったのは、おれだつたんだ

「にやあ」

「頼り過ぎることなく、甘え過ぎることなく、ひとりで立たないと  
いけないんだ」

「にやあ」

「わるいな、チョコ。別れの時間だ」

チョコに背を向けて歩き出した。

『いつまでも、見守ってるよ。だから』

光に還る瞬間に聞こえた声は、誰のものだったのか。

答えはきっと、おれにはわからない。

「ハ木橋くん！」

矢口が叫び声が聞こえた。気がついたらバランスを崩していた。右手にはナイスキヤッチでつかんだクッキーの包み。左手には反射でつかんだらしい矢口の手。

「…………」

何も言わず、矢口と見つめ合つ。

落ちそうになつた瞬間、おれがいた闇の空間はなんだったのか。ただの白昼夢だったのか？

「矢口、助かつた」

「まったく、もう……」

矢口はちょっと怒った顔。

「今度は落とさないで」

「……がんばる」

もう一度、柵によじ登る。その途中で矢口に聞いてみた。

「もし……」

「うん？」

「もし今、チョコがおれたちに向かいつとしたら、なんて言つと困

「う？」

今日は考える矢口の顔。注意して見ると矢口はすいぶんと表情が豊富だ。

「『前に進んで』じゃない？」

柵の上から帰ってきたおれは、スポットライトのような太陽に向かって、一言。

明日は違う景色が見られますよ！」。

「授業、数学か。わたし、まえかわ前川きらー」

「あ」

そうか、『前川』か。

時は進んで、一ヶ月。今日は三月十四日、ホワイトデーだ。

「矢口、これやるよ」

すこしづかたり緊張しているので、口調が雑になる。矢口にそのことを指摘された。

「市販でわるいが、チョコと、うちは手づくりの、チョコだ」  
ちなみに、市販なのはチョコレートで、手づくりなのはぬいぐるみだ。チョコレートと同じ色のネコのぬいぐるみ。

矢口にお礼を言われるのだが、お礼を言いたいのはおれの方だ。

「一ヶ月前のクッキーに負けないようにつくったんだ」

そりや、クッキーとぬいぐるみでは土俵が違うのはわかっている。だけど、負けたくないんだ。

「できるだけの『気持ち』を込めてみた。だから、その面ではあのクッキーには負けたくない。……どうだ？」

矢口はすこし、驚いた顔。おれの言葉をどう受け取ったのだろうか。

「何？ 健郎がつくったの？」

一貞が横槍を入れてきた。そんなことよりも、矢口の返事が気になる。

「それより、ゲームセンターに虎柄のネコのぬいぐるみが……  
かわいいやつか！？」

矢口の返事も気になるが、ぬいぐるみも気になってきた。

「うん、帰りに行こ」

「おう！」

そこでようやく矢口が口を開いた。

「健郎くんって、本当にかわいいもの好きなんだね」

結局、待っていた返事は帰つてこなかつた。  
まあ、いいさ。また聞けば済むことだ。

## (後書き)

どうも、夜影です。この作品は夜影が初めて、書いて納得できた作品です。本当はこれ以前にも一、三の作品が存在しますが、デビュー作として扱っておきます。何故なら、初めて他人に発表したのがこの作品でしたから。

原作に比べ、微妙に修正が入っています。

「これってどうなのさ?」という表現がいくつありましたので。ちなみに、書かれたのはずいぶん前。バレンタインデーまでに小説を一本書こうとして、間に合わなくて、一週間遅れで発表したというへタレ話付き。

所々で表現がアホな作品ですが、夜影にとつて思い入れの深い作品ですので、初心を忘れないよう、頑張っていきたいと思います。

作品完成	2007	·	02	·	21
作品掲載	2008	·	08	·	18

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8812e/>

---

チョコレートと子ネコと憂鬱

2010年10月8日15時52分発行